

島前カルデラ

隠岐諸島は 600 万年前に日本海で起きた 2 つの大きな成層火山の噴火により時間をかけて形成された。火山が形成される約 1000 万年前は、最終的に島となったこの土地は日本海の底にあったが、地殻活動により海底が深さ 1,000 メートルから海面からわずか 30 メートルにまでゆっくり上昇した。地殻移動によりできた 2 つの巨大な火山が噴火し、溶岩が固まり堆積して火山は成長した。ついに、その先端が水面を超え、島前と島後の島となった。その後 50 万年の間のどこかで、西側の火山全体が陥没して島前の巨大なカルデラが形成された。

よく誤って「クレーター」と呼ばれるが、カルデラは噴火口周辺に形成される円状のくぼみである。これらは噴火後、火山内部のマグマがあった部分が空になり、陥没しやすい空洞ができることで形成されることが多い。島前のカルデラができた後に、そのカルデラの中心部付近にさらに噴火によって溶岩が重なり、現在は焼火山（451.7m）として知られる中央火口丘が形成された。最終的に、海水がカルデラへと流れ込み、焼火山と外縁以外のすべてが海に沈んだ。

人間がこの島に住むようになってから約 3 万年の間に、島前カルデラは日本海の強い風と高波から守られた避難港として存在してきた。焼火山の上にある神社に灯る蠟燭は、雨風から逃れられる場所を探す船にとって灯台の役割を何世紀もの間果たしてきた。このことから、焼火神社の神は航海するものたちを守り、安全に港へと導くものとして崇められている。